

嫁菜 (ヨメナ)

キク科シオン属の多年草。本州の中部地方以西、四国、九州に分布し、やや湿った道端や土手、田のあぜ道などに普通に生える。背丈は30cm～120cmほど。芽立ちのころは茎の基部が赤みを帯び、生育に連れて上部でよく分枝する。地下茎があり、長く横に走らせて群落を作る。葉は長さ8～10cm、幅約3cmで長楕円形～披針形で互生し、縁には浅くて大きな鋸歯がある。7月～10月に分枝した枝先に径2～3cmの頭花を付ける。周りの舌状花は雌性で淡紫色～白色、中央の筒状花は両性で黄色。花弁が落ちた後には果実が並んでいる。果実にある冠毛は0.3mmほどなのでタンポポのような綿毛はない。

「嫁菜」という名は、美しい「嫁」のような花で若芽が食べられるから「菜」ということで名付けられたとされ、実際に春の若芽の中では最も美味であり、根元から切り取るように採るとキク科特有の香味があり、シュンギクのような味と香りがする。茹でておひたしとか和え物、炒め物、ヨメナご飯など、多様な食べ方がある。ヨメナは中部地方以西に分布するとされ、関東以北でもヨメナのように若芽を摘んで食べるシラヤマギクがあり、「嫁菜」に対して「婿菜」と呼ばれたりする。

ヨメナはいわゆる代表的な「野菊」の一つである。その野菊を題材にした小説に伊藤佐千夫の「野菊の墓」がある。矢切の渡しに近い旧家の息子である15歳の政夫と2歳年上の義姉の民子との淡い恋を描いた小説で、悲しい結末に至るのだが、その中で巧みに野菊が使われている。その「野菊の墓」の詳細は読んでいただくとして、小説は大人になった政夫が10数年前を思い出すという形式で進んでいく。

後の月の時分というから旧暦の9月13日の頃、新暦では年によって時期は違ってくるが凡そ10月中旬から11月上旬頃になる。二人は山畑の綿を取りに行くように命じられ出かけていく。二人が行く道の真ん中は乾いているが両側の田についているところは濡れて、<sup>うらが</sup>末枯れたタウコギ、水蕎麦麥などが繁り、都草も黄色く花が見える。野菊がよろよろと咲いている。政夫が野菊の花を一握り採ったあと、お互いに幼馴染であった二人

須藤 健一

が、それぞれに恋心を自覚するのであるが、その場面。

政夫が「民さんは野菊のような人だ」「僕は野菊が大好きだ」と言うと、民子は「政夫さんはりんどうの様な人だ」と笑いながら言う。政夫は「民さんがりんどうを好きになってくれればなお嬉しい」と続ける。

佐千夫は、まことに民子は野菊の様な児であった。民子は全くの田舎風ではあったが、決して粗野ではなかった。可憐で優しくしてそうして品格もあった。厭味とか憎気とかいう所は爪の垢ほどもなかった。どう見ても野菊の風だった、と民子に野菊を当てはめる。

二人が夜遅く家に帰ると二人の関係を咎められ、政夫は予定より早く中学へ進学し、民子は無理に結婚させられてしまう。その後、民子は流産から体調を崩し死んでしまう。民子の墓に参った政夫は弔いの人に踏まれたらしいけれどなお青々として立っている野菊を見つけた。さらに七日の間墓へ通って、民子の墓の周辺一面に野菊を植えた。

北海道から沖縄まで多種多様な「野菊」と呼ばれるキク科植物があるが野菊という植物はない。

